

## 第7報 学校に対する「誇り」の調査 (I)

### I. はじめに

昨年度から、われわれのグループは発展的目標をもった生徒の管理・指導をテーマとして研究・実践を進めて来ているが、われわれ教官側の気構えは生徒側にも次第に滲透していき、日常生活のみならず、体育大会や文化祭というような行事、あるいは学校新聞や学園誌などにも本年度は将来が期待される何物かの萌芽のようなものが感じられるようになってきた。

しかしこの萌芽のようなものは、現在このままで教官側が手を加えなかったら、それがこの学校の中においてまともなものに成長するかどうかは極めて危まれる状況であり、悪くすればまともなものどころか、成長それ自体さえ、おぼつかないかも知れない状況である。過去十数年間を振りかえってみると各時代それぞれに、このような萌芽は感じられながら、そのうちで学校の中に無事に成長し、現在に伝えられているものは極めて少い。もっとも今は成人したそれぞれの時代の卒業生達のクラス会などに出席すると、そこには当時われわれが期待したような方向に向って、それらの多くが生育をつづけていることを感じとることができるのはせめてもの救いではあるけれども。

本校も来年度は創立20周年を迎えることになり、同窓会からは数年前から「学園に緑を」のアップールが出されているが、生物学的な緑もさることながら、各時代の生徒達がそれぞれに、彼等の心の中に育ててきた精神的な緑をこそ、本校の中に生い繁らせてほしいと願わないではおられない。それぞれの時代の生徒達が、自分達の木を育て上げることは勿論大切なことであり、何よりも優先させなくてはならないのであるが現在、在校する生徒達が、自分達の木だけではなく、先輩によって育て上げられて来た木々の緑にかこまれて生活することは、人間の巾を拡げるためにも、また現在の彼等の生活自体を能率的に深めるためにも、これまた忘れてはならない重要なことである。この学校の中に深く根を下し、大きく育った木々の緑こそ、その学校の伝統であり、一方その環境の中にあって、それらの木々に負けないように自分達独自の木を育て上げているという自覚がその学校の誇りであると思う。

われわれの研究も二年目に入り、生徒の管理・指導の外からのアプローチは一応の段階にまで到達したように思われるので、このあたりで、研究の核心である発展的目標そのものに正面からぶつかってゆく必要を

痛感している。まずその手ははじめとして、現在の学校の中に、先輩の木々が繁茂し、生徒達それぞれの木も根づき生育してゆく条件として、不足、あるいは欠如しているものは何であるかを洗い出す目的で今回の調査を試みた次第である。

### II. 調査方法

先づ基礎調査として、本校の高1から高3までの全生徒に対し、一人一人が自分の学校に対して、「誇りをもっている」と言おうと思うか否かを聞き、更に、誇りを持っているならば「具体的にはどんな点に対してか」、また誇りを持っていないとは言えないならば、それは「何故なのか」を調査した。

その結果を整理してみると、実は誇りというような抽象的な言葉には一人一人の生活の環境や深さを反映して、予想よりはるかに大きな巾があることを感じさせられた。そこで次の調査として「誇りとは？」そしてついでに「伝統とは？」を、短い言葉で定義させ、その上で更に「学校にはどんな伝統があると思うか？」また「自分の学校に伝統や誇りを作り上げてゆくにはどうすればよいと思うか？」を聞いてみた。

定義の方は予期した通り極めて大きな巾があることが結果として判明したが、それだけに、それぞれの定義に基づいての、後の二つの調査に対する回答は、当然のこととしてこれまた非常に大きな巾がある上に、少し注意してみると同じ表現をとっていても、定義が大きく違っているために、その意味する所は全く別ものと判断せざるを得ないようなケースまで出て来て、このまま機械的に統計をとったとしても、余り意味のないものになるおそれが多分にあるので、この面については改めて調査を計画し直し、次の報告に廻すことにした。

なお本校の実態のみの分析では、不足面や、欠如面を客観的に指摘することはできないので、本校よりも伝統のしっかりしていると考えられる国立のA附属高校の高2の生徒2組(約100名)に同じような調査をお願いした。また以上の調査はいづれも無記名で行ったことを付記する。

### III. 調査結果

(1) 自分の学校に対して「誇りをもっている」と言えるか。

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

学 年	H 1		H 2		H 3		計		A校H 2	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
言 え る	49	39	56	31	40	39	145	109	65	21
言 え ない	44	12	29	20	14	3	87	35	11	4
(無 記 入)	3	0	3	4	0	0	6	4	1	0
計	96	51	88	55	54	42	238	148	77	25

調査人員が高3だけ約100名になっているのは、本校が昭和40年度から学級増になり、1学年3学級になった為である。この結果について言うことは、

- i) 環境への適応、ないしは妥協のため、「誇りをもっている」と言えるとする者の比率は、一応学年進行につれて増加していく傾向にある。特に高3の女子についてそれが多くなっているが、これはH1, 2に比し附中出身者の比率が高いことと、それに誇りをもって卒業しなくてはやり切れないという気持からの妥協も相当あると考えた方が、安全のように思われる。
- ii) 男女差は見られるかと思っ、一応分離して統計はしてみたが決定的なことが言える程、明らかな差は認められない。
- iii) H2について国立A附属高校の結果と比較してみると、「誇りを持っている」と言い得る者の比率が、本校の方がかなり下廻っていることが認め

られる。

ここで一寸と付記しておいた方がよいと思われることは、A校の方は所謂名門であり、生徒募集は、競争試験的に行なっているのに対し、本校の方は、同じ入学試験を外部からの志願者に対しては、競争試験的に近い適用の仕方をしているが、附属中学からの志願者には、準義務教育化してきている高校の教育に堪え得るか否かを目安にする資格試験的に適用していることである。さらに付言を要することは、この資格試験的適用を受ける附中生は、義務教育研究の対象としての要請から入学の際には1500名前後の応募者中より無作為抽出で決定した100名が毎年の入学者になっているという事実である。結果的には、毎年の高校の新入生は附中より約80名前後、残りが外部からという状況になっており、従って高1, 2は約半々の構成であるが、高3では附中出身者が8割近くになっている。

(2) 誇りとしている点

区分	事 項	H 1		H 2		H 3		計		A校H 2	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
本校特有	国立大学付高という名称	14	6	18	10	9	9	41	25	/	
	きびしい面もあるが自由	4	9	1	6	2	3	7	18		
	自主性を重んじている	4	2			1		5	2		
	理想を求めている学校の態度					2	4	2	4		
	高い競争率			3	2			3	2		
	クラブ活動が盛	3					1	3	1		
両校共通	立派な個性的な先生が多い	5	9	10	4	11	11	26	24	13	4
	生徒間が親密・すばらしい仲間	7	6	4	6	15	12	26	24	10	2
	よい雰囲気	5	12	14	9	4	5	23	26	4	
	予備校化していない高校らしい高校			10	6	13	11	23	17	1	1
	先生と生徒の間が親密	4	5	5	3	9	6	18	14	4	1
	環境がよい	6	5	5	2	7	5	18	12	3	1
	自分の入っている学校だから	2	6	7	7	5	4	14	17	2	
設備がよい	8	7	6	1	4	1	18	9	5	1	

共 同 研 究

	少数定員校で人間的指導が行なわれている	5	5		4	3	9	8	4	4	
	悪質な生徒がいない				6	6	6	6	2	1	
	レベルが高い			7	1	1	8	1	1		
	生徒の割に多い先生	4				1	4	1	1		
	先輩の社会における充実した活動				1		1		1		
A 校 特 有	先生の信頼と、それに応える生徒の責任	/								23	8
	秀才校・名門									19	8
	自由であること									16	9
	自らを以て自らを戒める気風									8	
	高い有名大学への進学率									5	1
	勉強しようという気迫が満ちている									6	
	生徒の個性尊重									4	2
	高校生活を本当に楽しくする学校									4	1
	古い伝統を受けついでいる									2	3
	よい生徒がそろっている									1	3
	進学中心のようでありながら巾の広い学校										4
	はっきりした自覚を持った生徒が多い									1	3
	まとまりのある学校(少数定員で)									4	
	大人物を作る教育									4	
	先輩の残した優れた業績									3	
ハイセンス	2										
充実しておもしろい授業		1									
冬の制服(あこがれの的だった)		1									

- i) 両校の成り立ちや、生徒募集方法の差から当然と言ってしまえばそれまでであるが、このように同じように誇りを持っていると言っても、その質には、随分大きな差のあることに、やはり驚ろかされる。
- ii) 特にA校独自の誇りが、質的にも広範にわたりしかも深味のある表現をとっており量的にも多いことは、本校として教官・生徒共に大いに注目しなくてはならないと思う。
- iii) しかし数は決して、多いとは言えないが、本校独特の誇りとして、「理想を求めている学校の態度」などの我々が日頃力を入れている点が、2番目から4番目にわたって上ってきていることは今後の努力の仕甲斐が予想され、ほっとさせられた

感じである。

- iv) けれども国立大学附高という名称などという、張り子の虎みたいなものが、本校特有の中のみでなく、全体の中でも群を抜いているとは、何とも情ない次第である。
- v) 両校共通ながら、「よい雰囲気」で代表されるような、論理的な鋭さを欠いた、ムード的表現で自分達の誇りを表わすものが本校に圧倒的に多いことも、大いに考えさせられる点である。
- vi) 「予備校化していない高校らしい高校」、「先生と生徒の間が親密」などで代表される、我々の努力点が、大体学年進行と共に増加していつていることも大きな救いである。

(3) 誇りをもてない者の理由

区分	事 項	H 1		H 2		H 3		計		A校H 2	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
	特別の理由なし	9	5	1	2	1		11	7		
	温室育ちでやる事が小さく、一本のすじが通っていない	3	2	5	2	3		11	4		

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

本校特有	信頼できる先生が少い	7		2	2	3	1	12	3	
	先生の力に束縛されている度合いが強い	7		2	2	1		10	4	
	生徒の質が落ちる	5	2	2	2	3		10	3	
	中学的である	5	1	2	2			7	2	
	友人関係がつまらない	3				1	1	4	1	
	学校の名前が余り知られていない			2	3			2	3	
	クラブ数が少く、不活発	3				1	1	4		
	実験学校で生徒はモルモットの			2	2			2	2	
	自分の成績が余りよくないので	3						3		
両校共通	進学状況が余りよくない					2		2		
	制服がきらい		1						1	
	誇りになるようなものが思い当たらない	4	2	6	7	5	2	15	11	3
A校特有	学校が好きになれない	5				1	1	6	1	2
	誇りを意識的に持つ必要はないと考える					3		3		3
A校特有	勉強に偏しすぎている								3	1
	常識外れの行動をする者が少ない								2	1
	学校は勉学の場にすぎない。人格に干渉する要はない								1	

i) (2) の場合と反対に、A校より本校の方が圧倒的に多くしかも明らかに不適應を起しているとは判断される者の数も比例して多くなっている点は大いに考えさせられる。

ii) しかも、誇りのもてない理由と聞かれても、「特別の理由なし」と突っぱねたり、「誇りになるようなものが思い当たらない」とスネてしまっているような、ないしは虚無的な態度の者の数が最高の数値を示していることは、生徒指導の面で、特に戒心すべき点であると思う。

iii) しかし、ii) の傾向が、学年進行と共に減少していることは、望みなきにあらずというところ。

iv) また本校特有のものの中で、共に高位の方にある「信頼できる先生が少い」、「先生の力に束縛されている度合いが強い」の二つは、我々の猛省の必要を痛感させられる。

v) 数は少いからまだしもながら、高3になって、はじめて2名、しかも男子で「進学状況が余りよくない」などと泣き事を言っているのは、何とも腑甲斐ない感じである。

(4) 誇りとは？

区分	事項	H1A		H2A		H3A		H2A・B		A校H2A・B	
		○	×	○	×	○	×	本校	A校	○	×
本校特有	無意識のうちに自分のもつもの	1	1	2		5		3			
	いいもの			1			1	1			
	自分自身が名誉に思うこと			1			1	2			
	相対的なもの					2	1				
	本人には重要なもの					1					
	特権意識と間違えられやすいもの					1					
	単なる虚栄心				1			1			
	強者が弱者に対してもつもの				1			1			
	先生がつくるもの			1				1			
老人の生きるための張り合い		1									

共 同 研 究

両 校 共 通	集団のもつ共通の優越感のより所	15	11	8	7	16	5	43	45	40	5
	自信をもつ対象	4	2	5	4	6		13	9	7	2
	自負する長所	8	3	3	3	4	1	6	5	4	1
	精神的に自分を支えるもの (無記入)	4	3	4	1			6	10	8	2
		4	3		2	1		3	7	5	2
	良い意味では自信、裏返せば高慢		2		1	2		3	3	2	1
	学校の発展のために尽力するうちに生ずる 愛校心	2				1		1	2	2	
	学校のすべてが自分に合致していること			1				1	2	1	1
	感動					1			1	1	
自尊心からくる合理化規制				1			2	1	1		
A 校 特 有	自分がその価値を信じそれに向かって努力し ている対象	/						8	6	2	
	エリート意識							3	3		
	心のうちにあり意気を高めるもの							3	3		
	着実な歴史をもち、現在も充実している状態							2	2		
	試験を克服し得た時、生ずる感情							1	1		

この表は、次の(5)と共に、調査対象も一部異り従って欄のとり方も異なるから、注意して頂きたい。即ち、男女差は特に認められなかったから、男女こみにし、むしろ誇りを持てる者(○)か、もてない者(×)かを基準に結果を整理した。また学年進行に基づく大体の傾向を把握するという観点から、対象は全校とせず、各学年のA組とした。

なお比較のための、国立A校のデータも○、×基準に組みなおし、そのデータが2クラス分であるので両校の比較がしやすいように、本校の高2A・B両組の、ただしこれは○、×を一とまとめてにしたデータをあげておいた。これについて注目すべき点は次のとおり。

i) 本校特有の事項は前の調査にも見られた論理性を欠くムード的表現の、しかも余り積極的態度が反映したものは受けとり難いものばかりであるのに対し、A校特有の事項は「エリート意識」を除き、あとは何れも切れ味のよい、しかも前向きの姿勢のまざまざとうかがわれるようなものばかりであることは、流石と感心させられると共に、いささかショックでもある。

ii) i)にも通じることであるが、A校には、極めて高次元の誇りが全般に浸透し、それに向かって積極的に努力していることが反映されているのに対し本校側のそれは、静的な感じである。

(5) 伝統とは？

区分	事 項	H1A		H2A		H3A		H2A・B		A校H2A・B		
		○	×	○	×	○	×	本校	A校	○	×	
本 校 特 有	生徒自身が創り出すべきもの		1	1		5		1	/			
	受けつき望ましい方向へ発展させるべきもの	3		1		2		1				
	時代を経るに従って出てくる傾向		1	1		2	1	1				
	存在するが判りにくいもの			1		1	1	1				
	生徒の手で作りに上げてきた生徒の心のうちにあるもの			1		2		2				
	学校全体にしみ込み流れているもの			1	1			4				
	good old days		1		1			1				
	よく理解していない者が口走りたがるもの	2										
	先輩後輩のつながりとなるすじ金				1			1				
偉い人と老人の好きなもの				1			1					

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

	長い程変えにくく、歴史の浅い程かえやすいもの					1					
両校共通	世代から世代へ自然に伝わる風習	16	11	10	7	16	3	41	30	29	1
	何代にもわたり培われてきたもの	12	2	5	3	9	1	17	26	25	1
	古くからある良いもの	3	4	2	3			10	13	8	5
	集団の中に、うけつがれる望ましい個性	1		2	2		2	8	12	9	3
	(無記入)	2	2		2	1	1	3	4	2	2
	抜きさしならぬ実存をもって人間を包むもの		1						4	1	3
	保守意識		1	1				2	2	2	
	着実な歴史がもたらした所産					1			3	3	
A校特有	虚像		2					1	2	2	
	別に何でもないが、それにより自分もそうであるような気持になるもの	/							2	2	
	自然にとけこんでゆくことのできる習慣								2	2	
	学んで知って楽しくなって力になるもの								1	1	
現在の在るべき姿を規制するのではなく、現在を未来に向かって向上させるもの	1									1	

- i) 本校特有の事項は、表現は(4)の場合と共通のムード的弱々しさを脱し切れず、しかも明らかに現実にこれと云って確信の持てる伝統の像は不在であることを反映したもので、奇妙な「なぞかけ」の文句みたいになっているが、その底には、誇りの場合と違い、積極的に追求し、創造しようという、(それより創造したいといった方がより当たっているかもしれないが)意欲がうかがわれることは、今後の生徒管理・指導の一つの方向を示すものとしてしっかり心にとめておきたいと思う。
- ii) A校特有の事項は、量的には決して多くはないが、形の上ではたまたま「なぞかけ」形式で本校と共通しているように見えるが、誇りの場合同様その格調の高さは、注目しなくてはならないと思う。
- iii) とにかく、A校の生徒は、はっきりと伝統の存在を意識し、本校の生徒は、それを真剣に求めている、(換言すれば、現在は未だ高次元の伝統は確認されていない)と言いうるように思う。

IV. 今後の計画

本調査は、最初にお断りしておいたように、未だ手をこけたばかりであり、データの量も、少く分析も厳しくはなく、不十分なことばかりであるが、我々としては、この研究を調査だけにおわらせるつもりは毛頭なく、むしろ本校の生徒に対しては、以上の各調査結果から洗い出された問題点を、ある面については生で示して生徒集会、あるいはH.R.のL.T.での討議の素材とし、また別の面(現在の本校の生徒の生活の中からは、少くとも上ってこなかった面)しかし、望ましいについては誘導的な調査を計画し、などして直接本校における誇りの確立、伝統の創造・伝承のエネルギーとしたい所存である。

なお、今回はA校との比較調査のみでも、これだけの問題点が発見できたのであるから、なお特長のある歴史の古い学校、また反対に、新進気鋭の若い学校などに御協力願って、他山の石(或は玉か?)を御提供願いたいと考えている。(戸苺・新村)

第8報 本校における「道徳」の実態Ⅱ

I. はじめに

現在、各中学校で行なわれている「道徳」は、まだ性格が定まっておらず、研究の余地が多い。適当な教授資料が少い為もあって、教師も生徒も途惑う場合がある。中には「道徳」の時間は自習であったり、H・R

の時間になったりしている学校もある。又教師の私見を鵜呑みにする生徒も出てくる。そのような実状の中で、文部省では、「期待される人間像」を前面に出し、小学校36、中学校21の徳目をかかげ、道徳指導書、参考書を出しかなり定型化した「道徳」を考えているようである。このことは昭和41年度道徳指導者講習会に